

狐塚古墳（下布田遺跡）

7世紀前半に造られたと考えられている円墳で、周溝の規模は内径44m、外径60mで、周溝の幅は3.7~9.0mです。墳丘は削られてわずかな高まりが残されていましたが、その下に天井部分が壊れた状態の河原石積横穴式石室が残っており、石室内から大刀3振、小刀1振、鏝2点、刀子1点、鉄鏃1点がまとめて出土しました。

二ヶ領上河原堰

二ヶ領用水の取水口として慶長16(1611)年に完成した堰です。改築前は、全体の幅の約2/3が固定堰となっていたため、洪水時には流れの支障となり治水上大きな問題を抱えていました。このため、固定堰を切り下げる改良を行い、洪水をより安全に流すことができるようになりました。また、堰の改築に合わせて魚道の改良も行っており、魚類の移動環境の改善が図られています。

多摩川白衣観音菩薩

この観音様は、洪水後の多摩川の濁流の中で発見されました。町を背にして激しい水流を押し止めるように川上に向かって立っていたそうです。当初は、調布南高校前の四つ辻の大榎木の下に観音堂が建立されましたが、桜通りの交通量増加に伴い、現在の場所に移されました。

砂利採取と京王閣

近代化による砂利の需要増大に伴い、京王電気軌道（現・京王電鉄）は多摩川原に採掘場を獲得し、大正5年に調布一多摩川原（現・京王多摩川）間を開通させ、砂利の輸送を増やしてきました。一方で京王電軌は沿線各所に行楽施設の開発を進め、砂利を採取した跡地を利用し、大浴場や土耳其風呂などを備えた「京王閣」を中心とする遊園地を開園しました。戦後、競輪場となって現在に至っています。

陸閘（りっこう）

陸閘は、通路の確保など、やむを得ない理由で堤防が連続して築けない箇所に、暫定的な措置として設けられる施設です。洪水時には堤防の機能を確保するため、容易に閉塞できる構造になっています。調布市内には、「調布第一陸閘」と「調布第四陸閘」の2箇所の陸閘が残っています。

石原水位観測所

洪水から流域を守るとともに河川の維持を適切に行うため、多摩川では、各地点で水位・流量、雨量などの観測をしています。石原水位観測所では自動観測を行っており、観測された水位情報は国土交通省京浜河川事務所に送られ、川の防災情報（国土交通省HP）などでリアルタイムに公開されています。

た ま が わ ある 多摩川を歩く



機能空間区分の設定

多摩川では、川の豊かな自然を保全しつつ、川が人々の多彩な活動の場となるよう「多摩川河川環境管理計画」が策定されています。計画では、河川敷を8つの機能空間に区分けしており、自然系空間と人工系空間の面積比を6:4としています。

上流から下流まで様々な表情を持つ多摩川にふさわしく、それぞれの地域に合った利用と自然の保全が図られています。

押立の渡し跡

押立村は慶長元(1596)年の洪水によって南北に分断されました。渡しは、現在の府中市押立町と稲城市押立を結んでいたもので、多摩郡押立村（現在の府中市押立町）が経営していました。下流の多摩川原橋や上流の是政橋の開通によってその存在性が薄くなり、昭和17年に廃止されました。

川崎平右衛門定孝の墓（龍光寺）

定孝は、北多摩郡多摩村押立（現・府中市押立町）の出身で、30代のころ新田世話役を命ぜられ、当時無堤部だった多摩川中下流の村々の水防を強化しつつ、新田開発に実績をあげました。のちに譜請奉行として押立の堤防改修工事、中流部左岸の両岸20余里に及ぶ公領、私領の堤防や樋門の改修工事に携わりました。

押立神社

慶長年間に、山城国稻荷大社（現在の京都伏見稻荷大社）の分霊を鎮祭したのが創建で、当初は、現在の多摩川の辺に鎮座していましたが、正保年間の大洪水のため現在の社地に遷座したと伝えられています。もとは「手津久里稻荷」といいましたが、明治14年に押立神社と改称され、社殿が改築されました。

押立低水護岸工事

多摩川は関東の中でも比較的急勾配の河川であるため、水の流れも速く、過去に多くの河岸侵食（河川敷が削られる）等の被災を受けています。その中でも、特に中流部は被災が頻発しています。そのため、河岸侵食から堤防を守る対策を進めています。

北多摩一号水再生センター

処理区域は、府中市・国分寺市の大部分、立川市・小金井市・小平市・東村山市の一部で、計画処理面積は5,123haです。A₂O法（嫌気-無酸素-好気法）という従来よりも水をきれいにできる高度処理方式を一部取り入れており、処理された水は多摩川に放流されています。